
CROSS ROADS

柊良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CROSS ROADS

【Nコード】

N7985N

【作者名】

柊良

【あらすじ】

なぜか他人の事故に巻き込まれる体質を持った高校生郁也と、彼が迷い込んだ異空間に住む謎の少女が、死に向かう人々の願いに触れ、行く末を導く物語。

CROSS ROADS (1)

人は死んだらどこへ行くんだらう？

うんざりした顔で彼は目を閉じた。

もう何度目になるのか。二十回を越えた時から、数える事もやめてしまった。

ある時は旅行中。ある時は帰り道。ある時は大事な試験の直前。いい加減慣れてしまった。

死ぬ事にも…。

叶郁也はごく平凡な一般家庭の長男として生まれた。
父と母は子供の頃に他界、親戚の叔父夫婦に引き取られ、今は1人暮らし。

人の良い叔父夫婦に育てられたこともあり、さして荒れることもなく16歳を迎えた。

郁也自身も自分の人生に不満を感じることはなかった。

ある一つの事を除いては……………。

(またか…)

いい加減慣れてしまった状況に、彼はさして驚きもしなかった。
だんだんと近づいてくる救急車の音も、今となっては子守唄に近くなった。

自分の安否を確認する誰かの声が聞こえる。…………大丈夫です。慣れてますから。

そう思って振った腕を勘違いしたのか、更に大きくなる声。…………

あゝ、うるさい。

その声にだんだんと意識が遠のいていく。

次に目を開けたら、どうせまたあの白い部屋の天井が見えるのだらう。

そう思いながら、彼はゆっくりと意識を失った。

しかし、

その日の目覚めは、いつもと少し違っていたのである。

……ニャー……

(……ん……)

……ニャー…ニャー…

(……なん、だ……)

……ニャー…ニャー…ニャー…ニャー……

(……猫……?)

(……そういえば、今回は…猫……助けたんだっ……け……)

「……どう……?」

(……よかつた、生き……)

「…具合は?」

(………てた?)

覗き込む少女の顔。

「………」

「大丈夫そうね」

「う」

「?」

「うわあああああああああああああああああああああああああああああ
あっ………?」

とっさにベッドの反対側まで飛び退る。

「ねっ！猫がつー！！ひっ！人型にいいいいいいいい！！？」
手近なカーテンを引っつかんで羽織ると、どこかで聞いたお経を
くり返し唱える。

これはいつもと違う…。全く違う！！

「……驚かれた事は何度もあるけど、……泣かれたのは初めて」
背中にどこかあきれたような声がかかる。それは人間の…、

「……………女の子？」

そこに佇んでいたのは紛れもなく少女だった。

年の頃は10歳位であろうか。フードのついた長いコートのようなものを羽織っている。

少女は一瞬彼をじっと見つめると、少し安心したようにベッドから離れた。

「意識ははつきりしてるみたいね。…それだけ元気ならすぐに生き返るでしょ」

そう言っって部屋を出て行こうとする。

「…え？それって」

問いかけようとしてベッドに手をかける。

「待っ…！！」

急速に意識が遠のく。事故にあった時と同じような感覚に体が崩れる。

全身が燃えるように熱い。急激な痛みを上げて倒れこむ。
次に彼の意識が戻った時には、いつもの天井が見えていた。

CROSS ROADS (2)

「いや〜！五十回目の退院おめでとう〜！」
パンパパンツ〜！」

ど派手なクラッカーの音と耳を覆いたくなるほどの拍手が室内に響き渡る。

場違いなその光景に通りがかった看護婦が目を見開いている姿が見える。

海浜病院505号室。窓から海が見えるその病室で郁也は頭を抱えていた。

あの妙にリアルな夢から目覚めた後、彼はこの部屋のベッドに横たわっていた。

あれから数日が過ぎたが、結局一度もあの少女の姿を夢に見ることとは無く退院の日を迎えてしまった。

「こんなに患者を助けられるとは、僕も医者になった甲斐があったというものだよ」

「…昂兄」

頭を上げて仰ぎ見た医者左手には使用済のクラッカーがしつかりと握られている。

彼の名は叶昂。郁也の父親の兄の一人息子。つまり郁也の従兄弟である。

大学卒業後に医学の道に進み、3年前からこの病院に勤めている。幼い頃から同じ叔父夫婦の下で育った為、今では実の兄弟のように仲が良かった。

「30回を越えた時はさすがの僕も焦ったけど…、まさかここまでいくとは…」

なにやら感慨深げにカルテを見つめ、パタンと閉じて言う。

「100回記念には何が欲しい？」

「やめてくれ！縁起でもないっ！〜！」

思わず振り下ろした腕の勢いは、枕の柔らかさに一瞬で吸収された。

「はあく、もう」

行き場を失った怒りに重いため息をつく、ぼんぼんと昴が肩を叩いてくる。

「まあまあ。それだけ誰かの命を救ってるってことだよ」

「……………」

顔を上げてふと窓の外を見つめると雲一つ無い快晴だった。

いつそ大雨でも降ってくれていれば、こんな大台には突入しなかったのかもしれない。

(いや、そしたら誰かが滑って転んで…、…結局同じか)

何度目かのため息をつく。いつも最後はこうなのだ。

いろいろ考えても最後には諦め、受けとめる事しかできない。

どうしようもないのだ。このしょうもない自分の宿命というものは…

10歳の時だった。

数ヶ月前から貯めていたおこづかいを握り締めて、郁也はおもちや屋に向かっていた。

その日は昴の誕生日だった。

プレゼントはずっと前から決まっていたので、坂道を登る足取りも軽かった。

坂道の終着点に辿り着こうかというまさにその時、交差点の向こう側から1匹の猫が通りに飛び出してきた。

赤い信号機の色。猛スピードで迫ってくる車の影。考えるより先に体が動いていた。

目覚めると郁也は病院のベッドの上にあった。ベッドの傍らには郁也の手を握ったままその手にすがって泣く叔母の姿があった。その隣には叔母の肩を抱く叔父の姿。

2人共郁也が目を開けると目を見開いて驚き、まだ痛みの残る郁也の体をぎゅっと抱きしめて喜んだ。

昂曰く、吹っ飛んだ先がごみ捨て場であった為、上手い具合にごみ袋がクツションになって助かったのだろうという事だった。おそるおそる猫の安否を確認すると、事故に驚いてそれはそれは元気な姿で飛ぶように逃げていったそうだ。

それが一回目。

二回目はその2ヶ月後。橋の欄干から落ちそうだった子供を助けるようにして落ちた。

三回目はその半年後。道路で立ち往生していた老婆を助けようとして電柱に激突。

十回目は11歳の春。飛び降り自殺をしようとしたサラリーマンに巻き込まれた。

二十回目は13歳の夏。川で溺れそうになった友人を助けようとして溺れた。

三十回目は14歳の秋。小学生の列に突っ込んできた車から子供をかばって衝突。

四十回目は15歳の冬。酔っ払ってホームに落ちかけたOLともみ合って転倒した。

そして五十回目

、
どうも自分は頭よりも体が先に動いてしまっらしい。

冷静にならなくてはと思いつつも、体はすでに行動を開始している。

切羽詰った時ほど「考えるよりもまず行動」という意識が働いてしまっのだ。

そんなこんなで今まで郁也が助けた人間は50以上、全ての生き物を含めたら100は余裕で越える。自分はなんてエコロジストなんだと真剣に悩んだ事もあった。

そして1つの結論に達した。

つまりこれが自分の宿命であり、逃れられない運命なのだ。
結局自分の力ではどうすることも出来ないのだと。
…いつからかそうやって決めつけている自分がそこにいた。

「これで自分が死んだらホント笑えねえよな…」

視線を戻し、ベッドに腰掛けたまま呟く。

「…そうだね」

役目を終えたクラッカーをごみ箱に捨てると、昴が真面目な顔で言う。

郁也は昴の事を命の恩人だと思っている。事故現場に真っ先に駆けつけてくれたり、急患の郁也を出来る限り早く治療できるように病院の準備を整えてくれたりと、いつも郁也の事を第一に考えてくれた。昴がいなければ今の自分はきつとここにはいない。

もちろん叔父夫婦も同様に思ってはいるが。

「確かに…、誰かを助ける為に体をはるのはとても偉い事だけど、それで自分の大切なものを失ったら意味が無いんだ」

昴が以前話してくれた事がある。医者 of 静止を聞かず、一切飲み食いもせずに重病の夫に一日中付き添って、結局夫と共に死んでしまった女性がいたと。とても安らかな顔だったと語る昴の顔が今まで見たことが無い位、憔悴していたのを覚えている。

「一番大切なのは、…君が幸せでいる事だから」

そういつてにつこり笑った。そして治療費もばかにならないしね、と呟いた。

郁也は苦笑しながらも、心の中で昴に謝っていた。

昴にはもう二度と、あんな顔はして欲しくなかった。

CROSS ROADS (3)

…はマンションの屋上から誤って転落したものとみられていま
す。では次の…

病院の帰り道、信号待ちをしながら街頭のテレビに視線を向ける。

(…俺がそこにいたら…、…ってスーパーマンかよ…俺)
ぼんやりと浮かぶ自分の考えに頭を抱える。

(なにやってんだろ…、俺)

人を助けて怪我をして。誰かの為に傷ついて、死にそうになって
…。

「……………俺……………、何がしたいんだろ……………」

ふと隣を見ると、並んで信号待ちをしている影があった。

猫だ。

(こいつ、……………どっかで)

信号が変わり歩き出す猫。その後姿には確かに見覚えがあった。

(なんだ、俺が助けた猫じゃん)

忘れもしない。記念すべき50回目の被害者の猫だった。

(無事だったのか…、よかった)

感慨深げにその猫を見つめる。と、見覚えのある建物に入ってい
くのが見えた。

(……………ここって…、うちの…、高校?)

猫は随分と慣れた足取りで校舎の裏へ裏へと進んでいく。

(なんだ?ここに住んでんのか?)

なんとなく気になって追いかける。裏門に近づくと、聞き覚えの
ある声が聞こえた。

「どこ行ってたんだ?散歩か?」

牛乳パックを片手に猫に話しかける男子生徒。同じクラスの橘豊
だ。

橘は郁也にとって、クラスで顔を合わせたら挨拶ぐらいはするが、おそらく街中で見かけても絶対に声をかけたりはしないであろうという程度の微妙な存在であったが、クラスでは結構な有名人であった。

別に橘がクラスを引っ張るようなリーダー的存在というわけではない。とにかく頭が良いのだ。

一度クラスの女子が全国模試で5位だったと噂しているのを耳にした事がある。

(…………でも正直あまり覚えていない。50位だったような気がする)

毎回追試ギリギリのラインを維持するのに必死な郁也にとって夢のような話だった。

「…………からさ、今日は大量だぞ」

順位の事をぼんやり思い出そうとしていると、橘の声が耳に入ってきた。

ビニール袋から食べ物を取り出し、脇に置かれたダンボール箱の中に広げていく。

猫はいつの間にかダンボール箱の中に入り、小皿に注がれたミルクを舐めていた。

(あいつの猫だったのか)

と思いながらその考えを改める。

自分で飼えないからここで世話をしているんだろう。首輪もしていないし。

(教師に見つかんないといいけど…)

「…………ごめんな」

橘の声に、思わず立ち去ろうとした郁也の足が止まる。

(ごめん?)

気になって振り返ってみたが、既に橘の姿は無かった。

じゃあ。

のどの下を撫でてやると猫は気持ちよさそうに鳴いた。

午後の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響くと、程なく帰宅する生徒達の声が遠くから聞こえてきた。生徒は常時正門を通る為、裏門はほとんど使用されない。

そんなわけで校舎裏は1日中人気がない。橘もそれを狙いここで飼っているのだろう。

退院してすぐ私服のまま学校に来てしまった郁也は教室に入れるはずもなく、かといって家に帰ってする事もないので、ただぼんやりと放課後まで猫と戯れていた。

結局橘はあれから1度も姿を見せていない。

(昼休みにしか来ないのかな…。メシいっぱい置いてったし)
ダンボールの中はパンやら小魚やら食べきれないほどの食料でいっぱいだった。

(ん？食べきれない？)

改めて見る。とてもじゃないが猫が1日で食べる量ではない。

(3日分？……いや、一週間でも無理だろ。これは…)
残ったとしても腐ってしまうだろうし。

(何日来ないつもりなんだ…、あいつ)
その時ふいに橘の言葉が思い出された。

(「ごめんな」)

嫌な予感がして立ち上がる。

「……あいつ、まさか…、…もう来ないつもりなのか」
ガシャン。呟く郁也の頭上で音が響く。

少し遅れて顔を上げた郁也と橘の目が合ったのはほぼ同時だった。その橘の顔が一瞬で眼前に迫ってくる…!

「ま…、またかよおおおおおおおおおっ…!!」
郁也は屋上から飛び降りた橘の下敷きになり、気を失った。

CROSS ROADS (4)

「……君…叶君」

目を開けると心配そうに覗き込む男子生徒の姿があった。

「……たち…ばな…？」

橘は郁也の声に頷くと、安心したように「よかった…」と息を吐いた。

「ずっと目を覚まさないから心配したよ」

と言って隣のベッドに腰掛ける。

ベッドで目を覚ます自分。それを呼び起こす声。ああ、またこのパターンか。

どうせまた誰かの事故に巻き込まれたのだろう。目覚めたばかりで思い出せないが。

「ああ…、悪かったな」

適当に謝りながらぼんやりと今回のケースを思い返す。確か前回
は猫だった。

その猫を偶然道で見かけて追いかけたところまではなんとなく覚えて
いる。

その先の記憶が曖昧だった。学校に行ったような気もするのだが
…。

頭を抱えて記憶をたどりながら、ふと隣のベッドに腰掛ける橘の
姿を見る。

「あ」

「？」

(そうだ。猫を追っていったらそこにいたんだ。こいつが校舎裏で
猫を飼っていた。

その猫に俺がえさをあげようとして…、それで…。)

「…なんか…、いっぱいあって…、こんなに…、いらねえよなあつ
て…」

記憶が鮮明になるにつれて、だんだんと怒りがこみ上げてくる。

「だ、大丈夫？ 叶君」

記憶の中の橘の顔が目の中の橘の顔とリンクした。

「おまえかあああああああつ！！」

「わあああああああつ！！」

胸倉を掴みあげてそのまま橘を押し倒す。ベッドが激しく軋んだ。

「あのな！ 俺今日退院したばっかなんだぞ！

退院したその日に入院なんて笑えねえよマジで！！」

「ご…、ごめん…」

あっさりと謝罪の言葉を口にする橘に向かって、もう一声怒鳴ろうとして口ごもる。

橘は怖がりも泣きもしなかった。ただ本当に申し訳なさそうな顔をしていたのだ。

どこか思いつめたような表情。それはあの時あの猫に向けていたものと同じだった。

ため息をつきながら郁也が手を離すと、橘はもう一度「…ごめんと呟いた。

勢いで押し倒してしまっただけに、妙に気まずい空気が流れる。

「…謝りやいってもんじゃ…、…どこだこころ？」

その空気を振り切るように辺りを見回す。保健室ではなかった。

近くの病院だろうか。

(昂んトコじゃない…な)

海浜病院の全ての病室を回って見たわけではないが、数十回もの入退院を繰り返した為、ベッドの配置や枕の形など基本的な構造はしっかりと頭に記憶されていた。

「あ、えと…ここは病院じゃない…みたいだよ」

おずおずと橘が言う。

「…病院じゃないって、じゃあ何処だよ。橘んち？」

橘が首を振る。確かに部屋にしては妙に殺風景ではあった。

「…あ、えと…、それでも…なくて…」

「ここは病院じゃないわよ」

凜とした声が橘の言葉を遮る。その声には聞き覚えがあった。尤もそれは夢の中でなのだが…。

「あ」

驚いて振り向いた先にはあの少女が立っていた。

「ホントにここ。俺達がいた所と違うんだな」

砂浜から水平線を見つめてつぶやく。

ここには一つの建物とそれを囲うように広がる砂浜しか存在していない。その周りには果てのない海がどこまでも続いている。

郁也と橘は目覚めた部屋があるその建物から外に出てきていた。

部屋の掃除をするから邪魔になる、と二人揃ってあの少女に追い出されたのだ。

「…うん。異空間って本当にあつたんだね」

橘の言葉を聞きながら、郁也は部屋を出るまでの少女との会話を思い出していた。

「…病院じゃない？」

少女が頷く。

「…というか、あなた達がいた世界とも違うけど」

淡々と告げる少女。やはり夢でなかったのか、それとも今が夢なのか。

そんなことを考えていた為、郁也は少女の言葉に反応するのが数瞬遅れた。

「…ん？世界って…？ここ、日本じゃないのか？？」

「…二…？それがどんな存在を示す言葉がよく知らないけど、…」

こはあなた達がいた所とは全く別の場所よ。……空間的な意味で」

「？なんだそりゃ」

『……異……空間ってこと？』

疑問符を浮かべる郁也の脇で橋がつぶやく。頷く少女。

『ここには時折あなた達のような人が流れ着くの。現実空間からの……迷い人が』

『迷い……って何に？』

『生きることに』

びくつと橋の体が震える。

『……俺。別に迷ってないけど』

『あなたは単に巻き込まれただけね』

郁也の膝からカクツと力が抜ける。

『ああしたかった。こうすればよかった……。そういう命を落とす寸前の強い思いが……、

この空間への道を紡ぎだすの。そしてこの砂浜まで流れ着く』

そう言って、黙り込んでいる橋へと視線を移す。

『……貴方にも何かやり残した事があるんじゃない？』

CROSS ROADS (5)

「砂、真っ白だね」

文字通りの白い砂浜。海は波もなく穏やかで、そこに静かに佇んでいる。

しゃがみこんで砂を掴み上げる橘の姿を視界の隅に捉えていると、頭の中で少女の言葉がよみがえる。

『…貴方にも何かやり残した事があるんじゃない？』

「…なあ、橘」

「何？」

「…なんで死のうとしたんだ？」

橘の砂を掴む手が止まる。

「……………直球だね。叶君」

「今更遠慮してもしょうがないだろ。…第一、被害者だぞ俺は」

「……………そう、だよな」

立ち上がり郁也に向き直ると、

「……………本当に、ごめん」

深々と頭を下げる。

「……………別に謝ってほしいんじゃないよ、俺は。ただ、理由を知りたいだけだ」

「……………理由……………」

口ごもる橘。

「……………その……………」

「……………」

「……………あの……………」

「……………」

「……………なんて…言うか……………」

「長えよー!!」

「パコーン!!」といういい音が海辺に響き渡る。

「ご、ごめん」

痛みに頭を押さえながら謝る橘。

これは現実と同じ効果があるんだなと安心しつつスリッパをポケットにしまう郁也。

「で、なんだよ」

「……………えっと、座っていいかな？」

あくまでマイペースな橘の態度に苛立ちを感じつつも、砂浜に腰を下ろす。

海からはわずかな波の音だけが聞こえてくる。

「叶君は…家族って、いる？」

「いねえよ」

即答する郁也の言葉に橘が目を丸くする。

「…そう、なんだ。……………ごめん」

「なんか、そればかりだな」

「う、……………」

「別にいいって。橘んちは？兄弟とかいんの??」

郁也が苦笑しながら話しかけると、橘は少し安心したように口を開いた。

「うん。弟と…、兄貴」

「いくつ??」

「弟は来月で6歳、…兄貴は18」

「そりゃまたえらい離れた弟だな。兄ちゃんは？高校生??」

「…うん」

「どこ高??」

「海城」

「……………」

海浜城北高校。全国でもトップクラスの進学校だ。昴の出身校でもある。

ちなみに郁也の通う高校はごくごく一般的な県立高校である。

「……自慢の兄貴だな」

「……うん、ホントに」

苦笑する橘。その表情からは言葉ほどの賞賛は見受けられない。

「……嫌いなのか……？兄ちゃん」

「……ええと、……分からない……んだ。兄貴はホントに頭いいし、運動もできるし……」

「……すぐく、尊敬……してるんだけど」

「けど？」

「……なんていうのかな。兄貴がすごすぎると、その期待は弟にもくるみたいで、さ」

なんとなく理解できた。橘さんのところはご兄弟揃ってすごいのね……というやつだ。

「心配することないだろ、橘なら。全国模試で5位……だったけ？」

「……兄貴はずっと1位だったから」

「……それはそれは」

「……なんか、最近両親の俺を見る目も変わってきてさ。……兄貴がT大受かってから」

「……そりゃ長男の将来は安泰だ。両親の目は嫌でも次の子供へと向かうだろう。」

「……まして弟がそんなに小さいのならば尚更だ。」

「……それで？勉強すんのが嫌になったのか？」

「……別に勉強はそこまで嫌いじゃないんだ」

「……じゃあ、……何で？」

「……」

「……橘はしばらく俯いていたかと思うと、おもむろに語り出した。」

「……はじめは……、単純に嬉しかったんだ。母さんに褒められるのが」

小学1年生のはじめのテスト。たしかとても簡単な計算問題だったと思う。

それでも100点だったのはクラスでたった一人。

『がんばったわね』

そうやって頭を撫でてくれた母さんの手はあたたかくて、…とても優しかった。

そのぬくもりを感じたくて、次のテストも100点を取った。その次も、またその次も。

…いつからだったろう、そのぬくもりを感じなくなったのは…。

CROSS ROADS (6)

『よかったわね』

『次も頑張るのよ』

『期待しているからね』

はじめは笑顔を見せてくれた母も、顔を向けず言葉だけでこたえるようになった。

満点をとってきても、それは家では至極当然のことのように扱われた。

あたたかい場所。いつしかそれは、単なる事務的な報告の空間となっていた。

それからはただ結果だけを報告して答案用紙はさっさと引き出しにしまうようにした。

満点の答案用紙などに意味は無い。母にとっては結果が全てであったからだ。

それが日課となったある日、今までずっと満点だったテストではじめて98点を取った。

それは単純なケアレスミスだったが、橘にとってはたいしたことではなかった。

順位はあいかわらず1番だったし、他の科目は全て満点であったからだ。

帰宅し、いつものように1番だったことを伝え、答案をしまう。

部屋に入りベッドに横になると、すぐに眠気が襲ってきた。

試験勉強で疲れた体を休めるため眠りにつこうとしたその時、ふいに扉が開いた。

母だった。

「なんなの…これは」

母の手には先ほど引き出しにしまったばかりの答案用紙が握られていた。

「なに……って、期末試験の英語の答案だけど…?」

「そんなことを聞いているんじゃないの。なんなのこの点数は」

母の手が震えていた。点数を報告しなかったことがそんなに気にさわったのだろうか。

「…えっと、…ごめん。でも1番だったし、わざわざ言っただけのことじゃ……」

「このくだらないミスの事を言ってるのよ!!」

母親の怒鳴り声によって、橘の言葉は遮られた。

「か……、母さん?」

「こんなミスをして……、恥ずかしいと思わないの? 今までずっと満点だったのに……」

「こんなことで……、こんな……」

肩を震わせながら怒る母親の姿を見て気づいた。

母はずっと確認していたのだ。今までの全ての試験の答案と、その点数を。

順位だけを報告し、引き出しにしまうようになった後もずっと……

…。

「……ご、ごめんなさい。次からは点数もちゃんと言うから。…き、気をつけるよ……」

「……でも……、ずっと満点をとるなんて……、そんなの……」

「無理だっていうの?」

気づくと母が冷たい表情をして見下ろしていた。

「……だ、だって、そんなの……どう考えたって……」

「……そう。じゃあ、もういいわ」

そう言うのと、母は静かに部屋から出て行った。

扉を閉じる音だけががやけに大きく部屋の中に響いた。

「母さんは完璧主義者ですごく真面目な人だから、そんな僕のいい加減な態度が許せなかったんだと思う」

郁也は知らず知らずのうちに眉間によっていた皺を指先で正した。橘の親が厳しいという話はなんとなく耳にしていたが、まさかそこまでだったとは。

早くに両親を亡くしている郁也でさえ、親の存在意義を疑ってしまつような話だった。

「それから一応試験結果は報告していたんだ。母さんも相変わらず順位は気になるみたいだったし……。順位だけは落とすことがなかったから、何問か間違つても、あの時みたいに怒鳴つたりとかはしなかったんだ」

これでいい。どうせずっと満点をとるなんてことは無理だったんだから、このまま順位さえ落とさなければ、母も何も言わないだろう。その時はそう思った。

そして橘が16歳になった冬、兄が丁大に合格した。

「僕は純粹に嬉しかった。兄貴が本当にそこに行きたがつてるのを知つてたし、その為に夜遅くまで勉強してる姿も毎日のように見たから」

橘は自分の事のように喜んだ。父も、そして母も。弟は小さかったが、家族の嬉しそうな顔を見て一緒にニコニコ笑っていた。

橘一家はその日のうちに親戚を集めて兄の合格を祝った。橘の親戚は皆彼の家の近くに住んでいるらしく、そういつた祝い事や行事の度に集まる習慣があるらしい。去年の大晦日、家で一人漫画を読んでいた自分の姿を想像しながら、郁也はそれはそれでめんどくさそうだなあと考えた。さすがに口にはしなかったが。

「それがどう自殺につながるんだ」

橘は一瞬びくつと肩を震わせると、俯きながら答えた。

「……………自分が必要とされなくなつたから、かな」

「は？」

「親戚が集まった時にね、母さんに言われたんだ」

『本当に姉さんの子供は頭がいいのね。下の子達も優秀なんですよ。？』

『ええ、今から将来が楽しみで。すごく期待しているのよ。きっと頑張ってくれるわ』

そういつて橋に目を合わせると、笑いながら言った。

『ね？』

それは確かに笑顔だったが、母の目は笑っていなかった。

CROSS ROADS (7)

「それからだよ。試験を受ける度にその時の母さんの顔を思い出すようになっちゃって。鉛筆を持つ手が震えて、頭の中が真っ白になっちゃって。それでも期待にこたえなきゃって思ってた問題は解くんだけども、それでも間違えて。この前の模試ではじめて順位を落としちゃったんだ」

「それで全国5位ならいいと思うが、今までの話と橘の深刻な顔を総合するとそうも言っていられないようだった。」

「…それで、お前なんかいらなんて言われたのか?」

橘が膝で握っている手を更に硬くして言った。

「何も」

「え?」

「何も言わなかった」

恐る恐る試験結果を母に手渡す。怖くて顔を上げられなかった。

母親が椅子から立ち上がる気配がした。思わず目をつぶり、歯をくいしばる。

「夕ご飯の支度しなくっちゃ」

ぱたぱたと台所にかけていく母。試験結果はその手にはなく、いつの間にか床に落ちていた。

呆然と立ち尽くす橘の代わりにすぐ後に帰宅した兄がそれを拾う。

「どうしたんだ、豊?これ、見せるんだろ?母さんは?」

橘は立ち尽くしたまま動かない。兄が台所に向かって叫ぶ。

「母さん!これ、豊の…」

「いいのよ。それはもう終わったから」

なんだ、もう見せ終わってたのか、と兄が呟きながら橘に試験結果を渡す。

紙を受け取りながら、橘は兄の言葉を反芻していた。違う。試験結果のことではない。母は自分自身に言ったのだ。

お前はもう終わったのだ、と。

「それから何度も試験の事とか大学の話を母さんにしようとしたんだけど、目を合わせてくれなくて…。すぐに話をはぐらかすんだ、音楽とかテレビの話とかして。そんな話、絶対慣れてないのに…」殴られるより無視されるほうが人は傷つくという話がある。

存在を認めてくれる人がいるからこそ自分はそこに存在できるし、存在する事に意味があるとも思える。何かに必要とされてはじめて人は自分の存在価値を見出す。

では、存在を否定されたら？自分がそこにいる事、存在している事を認めてくれる存在がいなくなったら？

自分が必要とされなくなったら？

「そうやっていろいろ考えてたら、よく分かんなくなっちゃって。本当に勉強が好きだったのかな、とか。1番ってそんなにいい事なのかな、…とか」

風が橘の前髪を揺らす。

「僕は多分ただ母さんに喜んでほしかったんだ。頑張ったって笑ってほしかったんだ」

橘がそっと砂をすくいあげる。砂がゆっくりと風にさらわれていく。

「…でも、母さんが必要としていたのは、人に自慢できる優秀な子

供だけだったんだ」

手の中の砂が消え。遠くを見つめる橘。

「僕は…、もう…あの世界にはいないんだと思う」

義務的に接しようとする母。無感情に語りかける父。出来の悪い弟を見るような兄の瞳。そんな家族をどこか不安そうに見つめる弟。自分のせいで家族の歯車も狂ってしまった。

橘は諦めと寂しさとが複雑に入り混じったような表情をしていた。それは郁也が今まで助けた人達と同じ顔だった。

何かを諦めて、それでも諦めきれなくて…。ああしておけばよかった。そうすればこんな事にはという表情。このまま消えたくないという誰よりも強い思い。

彼らはみな、確かに後悔していたのだ。

「僕は、きっと誰にも必要とされてないから」

CROSS ROADS (8)

貴方にも何かやり残した事があるんじゃない？

郁也が立ち上がる。靴の底に砂がつまっていたが、そんな事はど
うでもよかった。

「…お前、本気でそう思ってたのか」

橘が顔を上げる。またあの表情だ。憂いに満ちた表情。

「…うん」

「自分が必要とされてないって？」

「親の期待にも満足にこたえられない、弱い自分が嫌になったんだ。
こんな自分は、あの家族には必要ないんだよ」

「自分で、そう思ってたのか？」

「え？」

ポケットに手を突っ込んで見下ろす。橘がぼかんとした顔で郁也
を見る。

「人に言われたからそう思ってたんじゃないのかよ。母親に言われた
から」

「…それは」

「いや、正確には言われてもいないな。そう自分で思い込んでるだ
けだ」

「…口にしなくても態度で分かる事だってある」

「直接聞いたのか？母親に。自分は本当に必要かって」

「聞けないよそんなこと！それでいらなくて面と向かって言われ
たら、僕は…」

橘は声を荒げて立ち上がる。しかしすぐに俯くと郁也に背を向け
た。

「…叶君には分からないよ。人に見捨てられるのがどんなに怖いか

なんて」

「ああ、俺には分からない。でもお前なら分かるんだろ？」

「え？」

橘が背中を向けたまま視線だけを郁也に向ける。

「見捨てられる奴の気持ちを誰より分かってるお前が今度は見捨て
んのか、あいつを」

「…あいつ？」

橘が首を傾げながら振り向く。橘の話聞きながらもずっと脳裏
をよぎっていた、郁也が助けた小さくて、でも大切な1つの命。

「あの猫だよ」

橘がはつとして顔を上げる。名前も持たない小さな猫。でも確か
にそこに存在していた。

「あいつを見捨てるのか。餌だけ与えて、あとはさよならか」

「…ごはんならたくさん置いてきた。なくなったら、自分で探しに
行くよ」

「その途中で車にはねられたら？犬とか人間に襲われたら？」

「せ、生徒の誰かが見つけるかもしれない。家で飼ってくれるかも
しない」

「その前に先生が見つけたら？保健所に連れて行かれたら？」

「し、知らない！どうせ僕がいなくなっただって生きていける！関係な
いよ！」

ぐつと胸倉を掴み上げられる橘。いきなりの郁也の行動に目を丸
くする。

「お前じゃなきやダメなんだよ！！」

郁也が怒鳴る。その形相に思わず息を呑む橘。

郁也が力を緩め胸倉から手を離れたが、腰に力が入らずそのまま
尻餅をついてしまう。

「……………食わないんだよ」

「…は？」

上ずった声を発する橘を見下ろして言う。

「食わないんだよ、あいつは。お前のメシしか」

郁也は橘が去った後も猫に餌を与え続けていた。放課後のチャイムが鳴るまでずっと。

その間、猫は一度も餌を口にしようとしなかった。試しに餌だけ置いて猫の目の届かない所に移動してみたりもしたが、結果は同じだった。

「そんな…だって、今までだって…」

言いながら橘は思い出す。ある金曜の放課後、魚を2匹持っていた。塾があつたので1匹だけ与えて、もう1匹はそのままダンボールの中に置いていった。月曜の朝ダンボールをのぞくと、そこには魚がまるまる1匹そのまま残っていた。

「あの時は、魚が気に入らなくて…、てっきり自分で餌を見つけたんだと…思ってた。じゃあ、あの時は…2日間何も…」

「あいつは餌を探す為に外に出たんじゃない。お前を探してたんだよ」

はじめて郁也が猫に会った時、あの猫は確かに自分から郁也のほうに走ってきた。

おそらく制服を見て勘違いしたのだろう。同じものを着ているのだから橋に違いないと。

「さっき自分は誰にも必要とされてないって言ったな？」

「…」

「自分がいなきゃ生きられない奴がいるって事は、そいつは必要なんじゃないのか？」

「…」

「必要とされてるってことじゃないのか？」

「…僕…が？」

見上げて言う橘に手を差しさのべ、郁也は少しだけ笑って言った。

「どうも俺じゃダメみたいだからな」

橘がゆっくりと手を伸ばしながら言う。

「…終わったって言われた時、自分の人生もここで終わったって思ったんだ。もういいって…、お前は必要ないから、…いらない…って。…でも…、僕は」

「 帰っておいで 」

頬を一筋涙が伝った。それはまだ終わりたくないという確かな想い。小さな希望の欠片。

「…僕、あの場所においていいのかな？生きてても…いいのかな？」

橘の手を取り思い切り引き上げ、思わずよろける橘の背中をばしっ！と叩いて言う。

「それはお前が自分で決めることだろ」

橘が薄く微笑んだ。その姿がゆっくりと光に包まれていく。

CROSS ROADS (9)

「目が覚めたかい？」

橘が目を開けると彼の目の前には若い1人の医者が立っていた。

「叶先生、じゃあ私は707号室の患者さん診てきます」

「はい、お願いします」

その医者は傍らの看護婦を見送ると、再び橘に向き直る。

「覚えているかい？君は学校の屋上から落ちたんだよ。で、ここは近くの病院」

手について体を起こそうとすると、医師がそれを制した。

「無理しないほうがいい。外面的には無傷と言っても、君も郁也も頭を強く打っているんだからね」

「…あなたは…、叶君の…？」

「従兄弟だよ」

にっこり微笑んで言う。

「あいつの事だったら気にしなくていいよ。こういう事には慣れてるし、見た目よりだいぶ頑丈にできてるからね」

医師が指し示した隣のベッドには、大口を開けながら仰向けに眠る郁也の姿があった。

「…よかった」

「君も。助かってよかったよ」

医師の自然な笑顔につられながら隣の郁也を見る。

「僕、叶君に会ったんです。…夢の中で」

「そう」

傍らのイスに腰掛けながらあいづちをうつつ医者。

「…笑わないんですか？」

「?どうして？」

心の底から疑問に思っているという表情をする医者。

唐突な話を驚きも呆れもせず受け入れてしまうようなところは、少少だけ郁也に似ているかもしれない。思わず笑みがこぼれてしまふ。

「その夢の中で言ってくれたんです、叶君。…お前を必要としてる奴がいるって」

「そう」

「お前は必要とされてるからって…、俺じゃなきゃダメなんだって…」

「…それって家族の人かい？」

思わず顔を上げる。

「そうじゃ…ないですけど、…たぶん、家族と同じくらい…、今は…大きな存在…です」

あの猫が本当に自分の事を必要としているのかは分からなかった。もしかしたら単なる思い込みなのかもしれない。それでも、今すぐに会いに行つて抱きしめてやりたかった。きっと今もあの場所で待っているはずだから。

「そうか。…てっきりお母さんの事かと」

「え、母さん？」

「うん。君が運ばれてきてからずっとここにいたんだよ。命に別状は無いからって話したらやつと納得して、先ほど帰られたけど」

「…まさか。母さんが…そんなはず」

「すごく心配していたよ。自分が無理させたせいだって、…自分を責めてた」

意外だった。母が自分を責める姿など、想像したことなかったから。

『 帰っておいで 』

夢の中で聞こえたあの声。どこか聞き覚えのある懐かしい声。あんなに優しい声を聞いたのは本当に久しぶりだったから忘れていた。

「そうか…あの声は…」

その時病室のドアが開き、騒がしい声とともに男の子が入ってきた。

「あ、兄ちゃん！こんなところでなにしてんの？はやくかえってゲームやるよー！！」

「明。病院なんだから静かにしなきゃダメだよ」

その後ろからもう一人男の子が疲れた表情をして入ってくる。

「…明に、兄貴…。どうして、…ここに」

「すぐ退院できるって話だったし、家で待つてようと思っただけど…、明がどうしても豊に会いたい！って、聞かなくなっさ」

「だって悠兄ちゃんすぐ負けちゃうんだもん。豊兄ちゃんすっごく強いからやり方教えてもらうんだー！！」

「ねー！と同意を求めて抱きついてくる明。その傍らで肩をすくめる兄。」

「お前じゃないと嫌なんだっさ。ああ、もう…！すみません、すぐ静かにさせますから」

「いいえ、構いませんよ」

にこにこ笑顔で受け流す医者に頭を下げ、もう一人の弟に目を向ける兄。

「頼むから早く帰ってきてくれよ。明はつまんないってうるさいし、母さん達もなんか落ち着かないみたいだからさ」

「母さんが？」

「今日だけで皿3枚割った」

「……………」

あの冷静な母親がまさかそんなことになっているとは。啞然とし

ていると兄がくすくす笑いながら言った。

「父さんも父さんでなんかそわそわしてるし…。やっぱり皆ちゃんと家族が揃ってないと、調子狂うみたいだな。」

ぎゅっとしがみついてくる小さな弟。そのぬくもりに涙が出そうになった。

「…ははっ…。…そう…か…。皆、待ってて…くれてるんだ…ね」

誰かに必要とされることが、こんなにも嬉しいことだったなんて知らなかった。

(…ありがとう)

こらえきれなくなった涙が頬を伝っていくのを感じながら笑った。兄も弟も笑っていた。

久しぶりに心の奥底から笑顔になれたような気がした。

CROSS ROADS (10)

「どうして助けたの？」

どこまでも続く海を見ながら、郁也は橘と話した砂浜に少女と佇んでいた。

橘の姿はない。光に包まれた後、忽然と姿を消してしまった。もとの世界に還ったのだらう。確証はないがそんな気がした。

「別にあいつを助けようと思つてたわけじゃない」

少女が海から視線を外し、無表情のまま郁也を見る。風がやんでいた。

「ただ、あの猫を助けたのは俺だから。…そのまましておけなかつただけだ」

「あの子を死なせたくなかつたから？」

「せっかく助けたのに、また勝手に死なれたら…それはそれで、なんか嫌だろ？」

「そう…かしら」

再び海へ視線を戻す少女。波の音だけが辺りに響いている。

「……………ところで」

「？」

「なんで俺はまだここにいるんだ？」

先ほどからずっと頭にひっかかっていた疑問を口にする。

この空間の唯一の住人（さつきからひたすら水平線を眺めている）が何もつっこまない為、あたかもここにるのが当然のように錯覚しかけてはいたが。

「…そもそも。俺は迷つてさえないんだけどな」

「迷いは願いの分かれ道」

「は？」

「こうしたい、ああしたい。でもできない、でもやりたい。希望、願望、挫折、絶望。願いが叶わず挫折して、でも時に絶望の中から希望を見出す。」

願いを叶えるために甦る命もあれば、生きること疲れ消え逝く命もある。

この先生きるにしろ死ぬにしろ、ここに来る人は願いの答えを求めてやってくる。

自分の願いが、その答えが見えたから、彼は元の世界に戻ったの」

そう言うと、少女ははじめてまっすぐに郁也の目を見た。

「あなたの願いは人を助けること。言動や行動で突き放していても困っている人がいたら放っておけない。その願いを手助けしたくなる。」

だからあの人の『本当は死にたくない』という願いに引き寄せられてここに来たのよ」

「……それが本当なら、俺ってすげえいい奴じゃん」

少女から顔が見えないように1歩前に出ると、スニーカーの先が海水に触れた。

少しだけ頬が熱かった。ごまかすように声を大きくして問いかける。

「あいつが助かったなら尚更。俺の願いも叶ったってことだろ？なの…、」

何で帰れないんだよ、ばかやろっつー!!」

海に向かって鬱憤を晴らすように叫ぶ。その後ろで身を翻し歩き出す少女。

家へと足を向けながら、少しだけ…ほんの少しだけ楽しそうに言った。

「…貴方にも何かやり残した事があるんじゃない？」

小さな波の音の中で、白い砂の粒が風に舞ってきらきらと輝いていた。

了

CROSS ROADS (10) (後書き)

ここまでお読みいただき、ありがとうございます。

「CROSS ROADS」第一話はとりあえずこちらで完結となります。

続きのお話も同人誌が出来上がり次第、徐々にアップしていこうと思っておりますので、そちらもお付き合いいただければ嬉しいです。拙い文章ではございますが、ほんの少しでも読者様の心に何か残すことが出来たら幸いです。

本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7985n/>

CROSS ROADS

2010年10月8日11時02分発行